

連載 講座

第25回

協同精神と労働・大原幽学

作家 童門冬二

たしか足掛け四年前の“東日本の大震災”が起こった年のことだと思う。国際連合がその年を「協同組合年」と銘打った。国連は年に一度「ナニナニの年」として、掲げたその命題を世界全体で考えるように舞台を用意する。しかし、大震災があったせいかこの年の「国際協同組合年」は、日本ではあまり話題にならなかった。政府もマスコミもそれほど力を入れて諸行事をおこなったわけではない。わずかに「協同組合」と名乗る日本の諸組合が連合して、その意義を語り合ったのにとどまった。しかしこの「協同組合の理念を永続させよう」という活動はいまもつづいている。世界で最初に協同組合をつくったのは、イギリスロンドンのパン屋さんや、ドイツのモノづくり組合であったという。しかし細かく歴史を調べてみると、実はそのルーツは日本にあった。ロンドンとドイツの組合は天保年間につくられたが、そのちょっと前に大原幽学が千葉県の一部に「先祖株組合」というのをつくっている。もっといえば、その前の文政年間に二宮金次郎が栃木県二宮町で、「報徳仕法」を実行したのはこれもまた「協同組合の走りである」といわれている。ということは、世界において協同組合がもっとも早くつくられたのは日本だということになる。そこで大原幽学の「先祖株組合」について、その概略をご紹介させていただきます。

大原幽学はいままでいけば道徳学者だ。諸国を歩

いて、「人はこのように生きなければならない」と、日常の心がまえを説いて歩いた。しかし別に難しいことをいったわけではない。「親や年長者を尊敬し、兄弟や夫婦は仲良くし、目下の者や身分が低いからといってバカにすることなく、人間は平等に生きなければならない」というようなことを告げただけである。別に、反体勢とか反秩序とか、過激な方法を語ったわけではなかった。これに注目したのが、下総国長部村（おさべむら。現在の千葉県旭市）の名主遠藤良左衛門である。良左衛門は誠実な農民で、村の管理をおこないながらも近ごろの農民が著しく墮落していることを嘆いていた。長部村は内陸部だが、ちょっと歩けば九十九里の浜辺に出る。ここには飯岡その他の漁港がたくさんあって、賑わっていた。魚を獲る連中は気が荒い。また気風がいい。入った金はすぐ使ってしまう。自然、港町は花街ができ、バクチも横行する。そしてヤクザがこれを仕切った。農民は、真面目にコツコツ鋤を振るっているよりも、花札やツボを振るってサイコロで、一攫千金の金を得るほうが面白いし、また手っ取り早い。自然に、こういう港町の繁華街に出ていく若者が増えた。そのため、残された土地は荒れ、近ごろでは放置された土地がどんどん増えていた。良左衛門はこれを嘆き、

「土地を再興するのには、あれた農民の心の再興が先決だ」と考えた。あるとき、大原幽学の存在

を知った。このころ幽学は、あちこちの村を「心に道徳を」と説いて歩きまわっていた。良左衛門は幽学に頼んだ。

「どうか、うちの村の若い連中の心の荒地地をもう一度よい土地に戻してください」と。幽学は承知した。そして「そのためには、みんなが心をあわせるような組織をつくる必要があります」といった。良左衛門は「組織とは？」ときいた。幽学は、

「各農民に、土地の一部を提出させて、これを協同管理することです。そこでつくられた生産品を市場に売った金を共有し、これで火災とか地震とかの災害や、あるいはゴミの処理、治安の維持などに使うべきです」と説いた。良左衛門は感動し、すぐそのことを村にはかって、幽学を招いて指導者とした。しかし幽学が提言した「土地の一部を協同用に提供する」ということにはなかなかウンとはいわなかった。多くの農民が「先祖から伝えられてきた土地を、たとえ一部でも自分の時代に減らすことはご先祖様に申し訳ない」といった。ところが幽学は笑ってこう応じた。

「逆でしょう。ご先祖様はかえってよろこんでいますよ」「なぜご先祖様はよろこぶのですか」

「ご先祖様も、村のために自分の土地を提供して役立つのなら、ぜひそうしたいと思っておられたはずですよ。ですが、みなさんとおなじように代々伝わってきた土地を一部でも自分の代でこれを減らすのは申し訳ない、と思ってやめていたのです。ですからみなさんが思い切ってやればご先祖様は墓の下で、手を叩いてよろこびますよ。さすがわが子孫だ。わしができなかったことを子孫は勇気を持ってやってくれた。褒めてやろう」とおっしゃるに決まっています。そういわれてみんな考

えた。たしかに幽学のいうことには一理ある。次第にみんなの心がほぐれて、それぞれ土地を出し合った。幽学はこの協同管理に提供した組合員を集めて「先祖株組合」と名乗らせた。かれは、

「改革をおこなうのには、まず組合に入る人びとの心をほぐさなければならない」と考えていた。心をほぐすというのは「愛情を注いで心を柔らかにする」ということである。それはかれがあくまでも道徳と労働を切り離してはいけない」と考えていたからだ。協同組合というのはもともと、金によって集まる組織ではない。人と人の集まりだ。人と人の集まりということは言葉を変えれば“心と心の組合せ”による組織のことである。しかしこういう組織をつくり、長く保っていくためには人間の善意と、その継続が必要になる。ということは、「常に相手の身になってものを考える」というきもちが必要であり、同時にそれは「多少自分が損をしても相手のために尽くす」という奉仕の心がなければダメだ。村に火災が起こったときも、まず「火災にあった人のきもちになろう」という心がまえがなければ、みんなで協同して火を消そうなどというきもちにはならない。幽学が唱えたのは、なにも農事だけではない。村の日常生活におけるいろいろな課題を、「協同の心で解決しよう」と呼びかけたのである。この組合の結成によって、火災のときはみんなで協同して火を消し、同時に焼跡に元の家を復興するときもみんなが集まって作業をした。その心の底には、「火災に遭った人の立場に立つ」という協同の心がきちんと据えられていた。現在でいえば、住民の意識改革によって地域の自治を実現したということだろう。